

平成 24 年度東広島市教育委員会主催・広島大学マスタース共催市民講座 「モノからみるイギリス史」実施報告

広島大学マスタース会員 山代宏道
友田卓爾

下記のスケジュールで毎回 13:30～15:00 に東広島市サンスクエアで開催しました。
第 1 回：8 月 11 日（土）「遺跡からみる古代イギリス」（山代宏道）出席者 15 名
第 2 回：8 月 18 日（土）「建築からみる中世イギリス」（山代宏道）6+1 名
第 3 回：8 月 25 日（土）「紅茶からみる近世イギリス」（友田卓爾）14+1 名
第 4 回：9 月 1 日（土）「鉄・石炭からみる近代イギリス」（友田卓爾）12+2 名



講座をつうじて、記録史料の分析だけでなく、各時代の代表的モノを手がかりに歴史をみることでイメージをふくらませ、従来と違った歴史像を浮かび上がらせることをめざしました。以下、各回の講義概略と感想です。

（第 1 回）時代ごとの代表的遺跡をモノとみなして、古代イギリス史を概観しました。先史時代では、共同埋葬地、巨石文化を示すストーンヘンジ、ローマ期以前と考えられる山腹の白馬の絵を取り上げました。次に、ケルト（ブリトン）時代では軍事面からヒル・フォート（丘砦）、ローマ軍により婦女子も殺されたメイドウン・キャスル砦、航空写真から見る鉄器時代の定住地とローマ期ヴィラ、ケルト的宗教である自然崇拜としての泉信仰の井戸を紹介しました。

ローマ時代からは防衛のためのハドリアヌス長壁、その一部チェスターズ砦の建物跡、ローマ的都市バース、ローマ街道、モザイク、そして貨幣を取り上げました。アングロ＝サクソン期からはイースト＝アングリアのサットンフー王墓からの発掘物であるヴァイキング起源のヘルメットを検討しました。最後に、キリスト教布教との関連でイングランド北部のノーサンブリア文化、特に初期の布教活動を示すカンバーランドのビューキャスルの十字架、動物と曲線の渦巻き模様をもつケルト的なダローヤリンディスファーン修道院の福音書写本画などを紹介しました。

(第2回)まず、ヴァイキング期からノルマン征服前後の歴史を概観したのち、中世イングランドの都市・農村共同体の基本的3要素である城・教会・市場を中心にモノとしての建築を見ました。ヴァイキング船、十字架と戦士が一緒に彫られた初期ヴァイキング記念碑、女性のブローチ、アルフレッド王の防衛都市マームズベリーの航空写真を取り上げました。つぎに、ノルマン征服(1066年)を描くバイユー＝タペストリーの一部、ノルマンディー公ウィリアム(征服王、1世)によるロンドン塔(城)とカーン男子修道院、異父弟オドーによるバイユー＝カテドラル(司教座教会)、イングランド側のドーヴァー城、バトル修道院、ウェストミンスター修道院を紹介しました。

中世都市の3要素では、大司教座都市カンタベリー(カテドラル、市内)とヨーク(ミンスター、城)を取り上げ、地方レベルではノリッジ(カテドラル、城)とイーリー＝カテドラル、ノーフォークのキャスル・ライジング城、また、市場都市としてカンタベリーとヨーク、さらにコッツワルドのチピング＝カムデンとマームボロを検討しました。

モノとしての遺跡と建築の写真を使用しましたが、古代・中世イギリス史を概観することに時間をかけすぎたせいか、写真説明の時間が少なくなっていました。割り切って写真を中心とした講義にすべきであったかもしれません。(以上、マスターズ会員山代)

(第3回)紅茶(茶葉+砂糖)というモノがイギリスに普及定着する過程と「大英帝国」の形成完成の時期が重なることに着目し、17～19世紀の紅茶文化史を三段跳びになぞらえて跡づけました。最初に、今日インドで紅茶が製造されている工程と茶園の労働風景をビデオでみました。<17世紀 ホップ>地図と図版を用いて、カリブ海のイギリス領植民地から砂糖が輸入されたこと、砂糖黍生産の労働力が西アフリカからの奴隷であったこ

とを説明しました。次に、ロンドンの地図と「コーヒーハウス」の図版をみながら、ギャラウェイやロイドのコーヒーハウス(今日の保険機構ロイズが発祥した店)が果たした役割について解説しました。〈18世紀 ステップ〉茶と砂糖の消費量を明らかにしたグラフ図をみて、茶の市販と砂糖の値下がりによって紅茶が中産層のあいだに急速に普及したことを解説しました。次に、地図と写真・図版をみながら、有名なトワイニングとウェッジウッドの会社の起源にふれ、茶の市販と国産磁器の登場によって紅茶ブームがおこったことを説明しました。〈19世紀 ジャンプ〉グラフ図をみながら、茶の輸入の自由化と植民地インドでの茶の大規模栽培によって、紅茶が労働者階級にも浸透して国民的飲料になったことを説明しました。最後に、有名なリプトン紅茶の黄缶の写真をみながら、セイロン紅茶が世界に広まったことを解説しました。

(第4回)イギリスで大発展をとげた近代製鉄(大量生産)の足跡をたどり、鉄と石炭というモノとハイテク技術が人間の生活にとって決定的な意味をもったことを解説しました。発明技術の詳細な説明は省いて、製鉄が森林の荒廃を招いたこと、森の荒廃をなんとか食い止めたのも製鉄技術であったことを明らかにしました。〈16~17世紀〉大陸からイギリスに伝わった「高炉」法というハイテク技術について、当時の画・図版と現代の製鉄工場のビデオを用いて説明しました。次に、イギリス南部サセックス州の位置を地図で確認し、森のなかに建設された高炉鉄工所が立派なナラの木を大量に消費したことを、日本のたたら製鉄のビデオを併用して説明しました。また、イギリス地勢図をみながら、西部のセヴァーン河流域でも製鉄業が発達してデーンの森が伐られたことを説明しました。〈18世紀〉西部・中部に炭田地帯と高炉製鉄所の分布図をみながら、石炭を燃料とする製鉄技術の発明によって森の荒廃が瀬戸際で食い止められたことを説明しました。次に、アイアンブリッジ(世界遺産)の画を示して、この橋が「鉄の時代」の記念碑であることを説明しました。〈19世紀〉鉄道網のおかげで観客がロンドンに押しかけた第1回万博の会場「水晶宮」と展示された蒸気機関車を描いた画を示して、50年代がイギリスの絶頂期であったことを説明しました。

理屈っぽすぎたのではないかと反省しています。しゃべる内容を絞りこみ、ビデオをもっと活用する方法もあったかと思います。(以上、マスターズ会員友田)